



三川町 / 菜の花畑

晩春を知る 元気色の花畑

 庄内銀行

Cradle 5 「クレードル」 出羽庄内地域文化情報誌

2015 May/June
平成27年5月11日発行(隔月奇数月発行)第5巻5号(通巻29号)

発行 / Cradle事務局 山形県鶴岡市山王町8-15(株式会社 出羽庄内地域デザイン) 電話0235(64)0888
制作 / Cradle編集部 山形県酒田市京田2-59-3(コアック・ビルディング) 電話0234(41)0012

美しくつかしい、日本をのせて。

Cradle

特集
松森胤保の世界

庄内憧憬
ガボリオ・マリ
慶應義塾大学経済学部 教授

[クレードル] 出羽庄内地域文化情報誌

5

2015 May/June
TAKE FREE
NO.29



東京のにぎやかな雑踏の中でふと頭をよぎるのは、庄内の美しい水田や集落の風景、人々の温かい笑顔。私に乗せた列車が鶴岡や酒田に近づくと、いつも胸が高鳴ります。

生まれ故郷に帰るかのような私にとっての日本ガボリオ・マリ

庄内地方との出会いは今から30年以上も昔のことです。第二次大戦後の日本の農村社会の変遷を研究するため来日した私は、当時、東北大学の学生でした。指導教官だった田原音和先生の薦めで庄内地方をフィールドワークの地とし、私の日本の出発点となって以来、庄内は今も研究の中心であり続け、中でも酒田市旧北平田村とは強いご縁で結ばれることになりました。

農村社会の研究は私にとって大変興味深いものです。地域の特性を深く知るだけでなく、日本の社会や文化を広く理解することができるところからです。集落のお祭りや、神社の年中行事等にも参加させていただいたり、伝統料理をご馳走になったり、貴重なひと時を地域の皆さんと過ごすことができました。長い間、大変お世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。

私は庄内の村、神社、伝統的な

家屋、そしていつでも私を温かく

迎えてくださり、集落と家の歴史を熱心に語ってくださった庄内の皆さんがとても好きです。また、季節ごとに変化する水田の景色もとても魅力的で感動を覚えます。特に5月の集落はまるで、水田の中にぼつんぼつと浮かぶ島のようなです。6月になると田んぼは一面緑色に煌めき、実りの秋には頭を垂れた稲穂が黄金色に輝きます。この地域の豊かさと美しさの源である水田の風景は、先祖たちが時をつなぎながら大切に育み、現代に遺してくれた宝物です。彼らなしではこの光景を目にすることはできなかつたでしょう。

お米の他にも庄内地方では果物や野菜等、類を見ないほどの名産品があります。職人が愛情と情熱を持って作品を作り上げるかのように、農家の皆さんが大切に育て上げた産物といえるでしょう。私の国の名前がついたら・フランス（フランスでは発見者の名前をそのまま取り、Claude Blanchetといいます）という梨に出会った時はちょっと驚きましたが、大変嬉しかったです。このフランス生まれの梨はもう一世紀以上も前に日本に伝わったそうです。

庄内を訪れるたびに日本の原風景におかれた気分になるのは、この地が私にとって初めての日本であり、長年通い続けた場所であるからだけでしょうか。東京のにぎやかな雑踏の中でふと頭をよぎるのは、庄内の美しい水田や集落の風景、そして私にとってかけがえない人々の温かい笑顔です。私に乗せた列車が鶴岡や酒田に近づくと、いつも胸が高鳴ります。まるで生まれ故郷に帰るかのように。



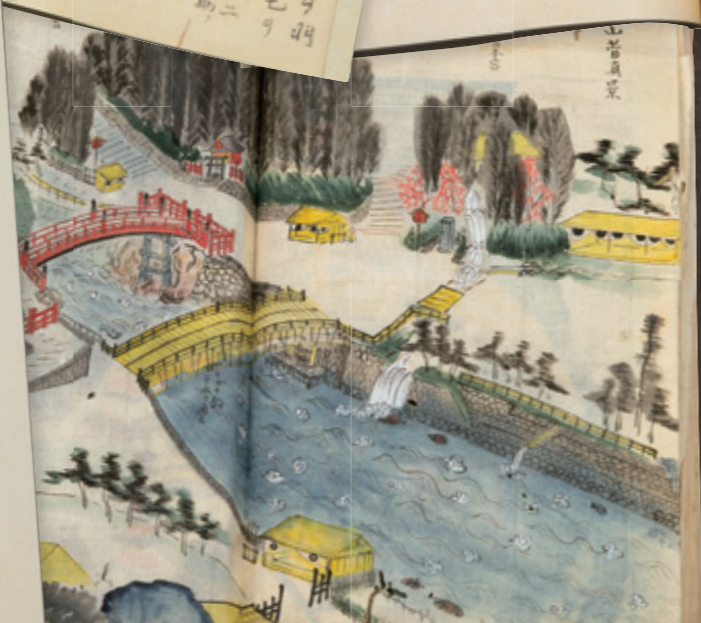
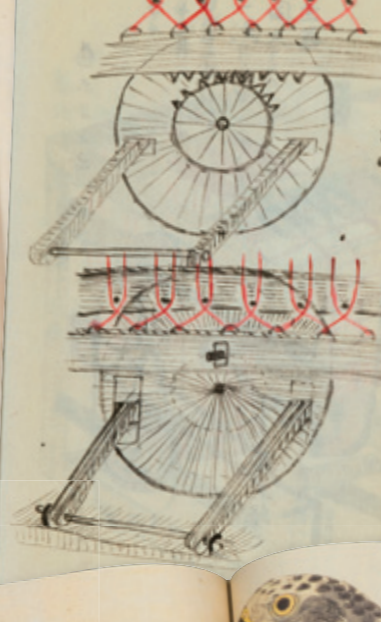
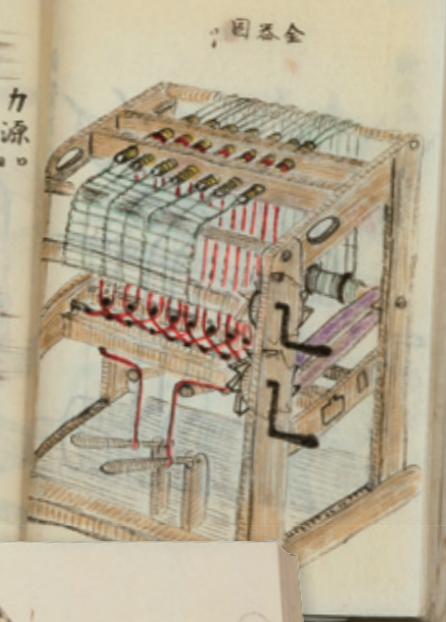
鳥海山を映す、田植えを終えた庄内平野

がぼりお・まり／慶應義塾大学経済学部教授。フランス南西部、ワインで有名なボルドー地方にほど近い町で生まれる。1980年、フランス国立東洋言語文明学院日本語科修士課程修了。1981年、フランス国立社会科学高等研究院現代日本研究センターD.E.A.取得。1986年、東北大学大学院教育学研究科後期博士課程単位取得退学。1996年、慶應義塾大学経済学部助教授。2005年から現職。経済学部でフランス語の授業を担当する一方、明治から今日における日本の農村社会の変容に関する研究を続けている。

特集 | Special Edition

松森胤保の世界

幕末から明治へと世の中が大きく動いていた頃、目に見えるもの、見えないものにもまで筆を走らせ、時代に左右されない自らの世界を創造した人物、松森胤保。その軌跡を後世に知った人々は彼のことを「日本のレオナルド・ダ・ヴィンチ」と称しました。



（参考）
科学研究 第7号 松森胤保と西洋博物図譜（文江崎徳）1944年、中村正一著
幕末明治の隠れたる村学者 松森胤保 1947年 自文堂 月刊メダカ山形メダカ
城下町松山と松森胤保 1980年 東北出版 鳥獣虫魚譜 一 両羽博物図譜の
世界 一 解説 磯野直秀 1988年 八坂書房 松山町史 巻1 1989年
松森胤保翁顕彰会 編 郷土の偉才 松森胤保（文志田正勝）1990年 科学朝日 編
植物学の系譜 一 東北の地を博物学の道に歩む 松森胤保（文志田正勝）1991年
在日日記 起人 松森胤保の世界（文志田正勝）1995年 両羽博物図譜刊行会 両羽
博物図譜 両羽翁顕彰会 第一期（第四期）1993年、1995年 国立科学博物館
「文」第423号 松森胤保と西洋博物図譜の世界（文志田正勝）2000年、山形
新聞 両羽博物図譜を顕彰へ（文志田正勝）2009年4月、2010年6月、7月
（協力）資料提供
有限会社 写真の松森 酒田市立光丘文庫 公益財団法人 致道博物館
酒田市立松山文化伝承館 鶴岡市教育委員会 社会教育課 土佐田正勝



肖像写真と家族写真

人生初の肖像写真は41歳。その4年後、江戸で写真機を購入し、家族や親族を多数撮った。



特集 Special Edition 松森胤保の世界



甲冑姿の胤保

長坂家伝来の甲冑に身を包んだ晩年の姿。この甲冑で戊辰戦争の激戦を戦った。



『北征記事』

庄内藩参謀・松山藩隊長として戊辰戦争に出征した際の陣中日誌。明治4年(1871)に清書。

幕末・明治に 生きた天才科学者

「寝ている姿を家族でも見たことがない」「晩年のやせ細った自分の病床姿まで記録した」など、超人的な人物像が120年を超えた今も子孫に伝え残されている松森胤保。武士、政治家、科学者として、幕末から明治にかけて激動の時代を生き抜きました。



矢立
胤保は筆と墨を入れた矢立をどこに行くにも持ち歩き、記録した。

1825 1862 実学重視の 幼青年期

松森胤保は文政8年、城下町鶴岡で、中級士族である長坂家の9代目として生まれました。7歳で小鳥を飼って以来、鳥に夢中になり、12歳でトリモチを付けた竿で小鳥を生け捕る「鳥刺し」に没頭。自らさまざまな鳥を捕まえて記録するようになります。鳥以外にも海岸できれいな石を見つけた9歳頃からは、鉱物や化石、石器、土器などを収集するようになりました。

13歳で庄内藩校致道館に入所。トントン拍子に進級し、21歳で句読師(小学校教師)に、32歳で助教(教頭)に就任。38歳で家督を相続して致道館を去るまで、庄内藩士の子弟教育に励み

1863 1868 松山藩の 付家老として

文久3年、39歳で庄内藩の支藩である松山藩の付家老に任命され、一族で鶴岡から松山藩に移住します。その翌年、江戸市中見廻り役として江戸へ赴き、激務のさなかに珍鳥を求めて鳥屋を巡り、初写真を撮るなど、開国後の江戸を思う存分見て回りました。またこの時、江戸で藩主に銃猟の許可願いを申請。松山に戻ってからは暇さえあ



自ら発明開発した網織機を手にする晩年の胤保。

「松守」の姓を贈りました。胤保は恐れ多いと「松森」に改称し、以後は松森姓を名乗るようになります。

1868 1892 政治家を経て 執筆に没頭

明治元年11月、松山藩主の厚い信任を得た胤保は、藩主と共に戊辰戦争の謝罪のために東京へ向かいました。幸い寛大な処置で済んだため、鳥屋めぐりに精を出し、顕微鏡やカメラを購入し、写真技術を習得します。

明治3年の46歳で、松山藩大参事を拝命。藩の枢機に参与しつつ、戊辰戦争の陣中日誌『北征記事』の浄書に精を出し、銃猟も復活。翌年の東京勤番では初めて蒸気船に乗って、文明開化

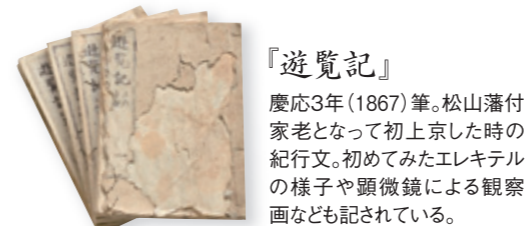
が進む横浜や横須賀を遊覧しました。その後は松嶺区長、松嶺藩校里仁館校長、松嶺開進中学校校長などの公職に就任。55歳で校長を辞職し、家督を嫡子に譲って鶴岡に戻ってからも、山形県会議員や酒田戸長などを歴任、激務の中で執筆も続けました。

そして59歳で欧米の動物図譜に刺激を受け、『両羽博物図譜』の執筆に着手。61歳ですべての公職を辞してからは著作物のまよめに没頭し、亡くなる3ヵ月前まで画譜を描き続けました。明治25年4月、永眠。享年68歳。

胤保56歳の時、一男昌二が父の「子々孫々が写真で食べていけるように」との考えを受けて開業した松森写真館。現在は、胤保から数えて5代目の昌保さんがその意志を継いでいます。

特集 Special Edition
松森胤保の
世界

多彩で多岐にわたっています。これら著作の原動力は、収集癖と記録癖、好奇心といった胤保の超人的な才能によりますが、文明開化という時代の大きな変動期に、西洋文明に触れたことも関与しています。特に初めて上京した江戸では、カメラや顕微鏡など時代の最先端に数多く出会いました。その直後に書き始めた『銃獵誌』や『大泉諸鳥写真画譜』、『家藏五玩雑録』が、それまでのメモや記録と一線を画す博物学的著作となったのは、そうした背景があったからです。



『遊覧記』
慶応3年(1867)筆。松山藩付家老となって初上京した時の紀行文。初めてみたエレキテルの様子や顕微鏡による観察画なども記されている。



発明から窮理学まで 博学多彩な稿本の数々

胤保没後、松森家で保管されてきた膨大な著作類。昭和に入り、『兩羽博物図譜』などを酒田の本間家へ譲渡すると、昭和10年に本間家が東宮殿下台臨十周年記念図書として光丘文庫に寄贈し、世間に知られるようになりました。現在は、全著作を松森家と酒田市立光丘文庫で保管しています。

松山藩付家老として藩政を執り仕切っている間も、戊辰戦争従軍時も、地方政治の要職についている時も、筆を止めることがなかった松森胤保。300冊を超える著作の内容は、個人的な随筆から日記、紀行文、政治、教育、経済、戊辰戦争、文学や漢詩、科学や博物学に関することまで、まさに博学



『南郊開物徑歴』
嘉永2年(1849)～明治23年(1889)筆。発明工夫の進捗状況を記した日記体の記録。

開物学

若い頃から機械への関心も高かった胤保は、さまざまな産業機械の発明開発に取り組みました。24歳から晩年までの開発品が載っている『南郊開物徑歴』には、網織機からデンプンの製造機、水揚げ機、蕎麦と素麺の製法、自転車や飛行機、地動儀まで幅広い発明品の設計図が載り、書き出しには必ずその動機と日時が記され、改良案についても詳細に書かれています。

また明治に入ってから、同著に「これまで誰も作ったことのない便利な機械を作って、世のために役立てよう」と思い、考案している」と記されているように、網織機など、士族授産を含めた地域の新しい産業振興を目指した研究開発が行われました。

開物学の他著には『南郊意匠開物』や『開物奨励』などもあります。



『玉石雑抄』
明治12年(1879)筆。庄内の川北を中心とする鉱物や石器、古代土器の収集記録。

『弄石餘談』
明治11年(1878)～24年(1891)12月筆。モースの大森貝塚発掘に刺激されてまとめた調査研究書。

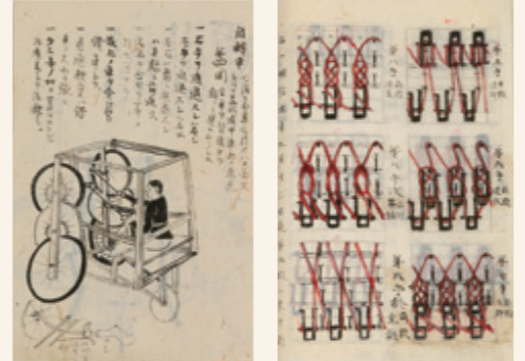
考古学

幼い頃から石が好きで、化石や石器、土器にも興味を広げていた胤保。明治11年に執筆を始めた『弄石餘談』は、モースによる大森貝塚発掘に刺激を受けたもので、庄内で発掘した遺跡の記録をとり、遺物を丹念に観察記録しています。その功績は『松山町史下巻』によると「江戸時代の弄石家の流れを汲む側面を残しながらも、近代の実証的な科学としての考古学を合わせ持った調査研究」と評されています。

明治23年、友人の羽柴雄輔が創設した「奥羽人類学会」の初代会長に就任。この学会は明治34年に解散するまで、東北における考古学研究の中心的な存在でした。



鳥船(飛行機)
さまざまな道具を考案するうちに、設計意欲に駆り立てられたという夢の設計。月山を飛び越えて行く姿が描かれている。



自転車
明治15年9月10日、山形へ行く途中の車内で考案したというもの。

網織機
士族授産のための一助として考案。何度も造り、改良を重ね、実用化を目指した。

光学



『視道和言』
明治5年(1872)筆。幾何光学一般に関することが述べられている。

音響学



『聴道和言』
明治9年(1876)筆。音の本質や音の伝播に関する理論の内容。11章にわたって書かれている。ほか「音声私言」。

写真術



『陽光画譜』
明治14年(1881)筆。撮影準備・現像・焼き付けや薬品の値段、自身の撮影の成否も記録。「全家族を写して子孫に伝えたい」「この写真の術に通じ、二男昌三に与えたい」との思いから書かれた。

窮理学

『求理私言』
(光丘文庫蔵)

明治8年(1875)筆。宇宙や大砲・地球に関することが記されている。

『物理新論』
(光丘文庫蔵)

明治18年(1885)筆。天文地理のほか物体に関するものなど、諸生物の進化論について記されている。

『両羽博物図譜』を読む

好学の士、松森胤保が晩年を費やした『両羽博物図譜』。現在の山形、秋田県にほぼ相当する地域の動植物をまとめた全59冊は、まさに唯一無二の存在です。日本の近代生物史が黎明期を迎えていた時代に胤保は自然の中に何を見ていたのかを探ってみたいと思います。



美術ではなく博物として。胤保畢生、稀代の記録

鳥、獣、魚介、昆虫、草花、樹木、果実、菌類と、胤保の動植物に対する興味は最晩年まで尽きることがなく、『両羽博物図譜』は未完のまま、現在は酒田市立光丘文庫に保存されています。

図譜がまとめられた頃の日本は、文明開化による近代化、西洋化の風が吹き始めた頃でした。胤保は、蝶の採集に明け暮れていた明治10年代中頃に欧米の動物図譜を目にする機会があり、同様のものが日本には存在しないことに発起し、図譜を作ることを思い立ち、たと考えられています。自分が作るならば、この地域の動植物を網羅しようと、制作に着手。新たに書き下ろしただけでなく、過去の著作から切り貼りしたり、書き写したりしたものも集め、4974点(動物2116点、植物28

58点)を収録しました。おそらく自身の集大成だったその記録は、亡くなる直前まで綴られ、こうして全59冊は未完の大作となりました。

図譜には観察記録をはじめ、採集・飼育・栽培法まで、独特の口調で子細に記載され、胤保の真骨頂というべく画力あふれる絵が、まるで今にも動き出しそうなほど精彩に描かれています。

半世紀を過ぎて甦った庄内の精彩な自然史

この図譜が書かれてから半世紀以上たった昭和20年代、研究者らの間でその存在が見出されて話題となり、平成5年には庄内の有志によってその一部(禽類を中心に総論を含む)14巻が翻刻出版されました。酒田市で長年教職にあった五十嵐敬司さんは、その刊行委員の一人。五十嵐さんは、恩師で松山出身の生物学者・阿部襄先生から翻

「図譜の史料的价值は大きく二つあって、一つは江戸から明治にかけての地域の動・植物相をまとめた自然の記録であること。この生き物がいたなら、こういう自然環境だったという推察ができますから、分布や増減を知る手が



松森胤保の自然史③

『胡蝶録』

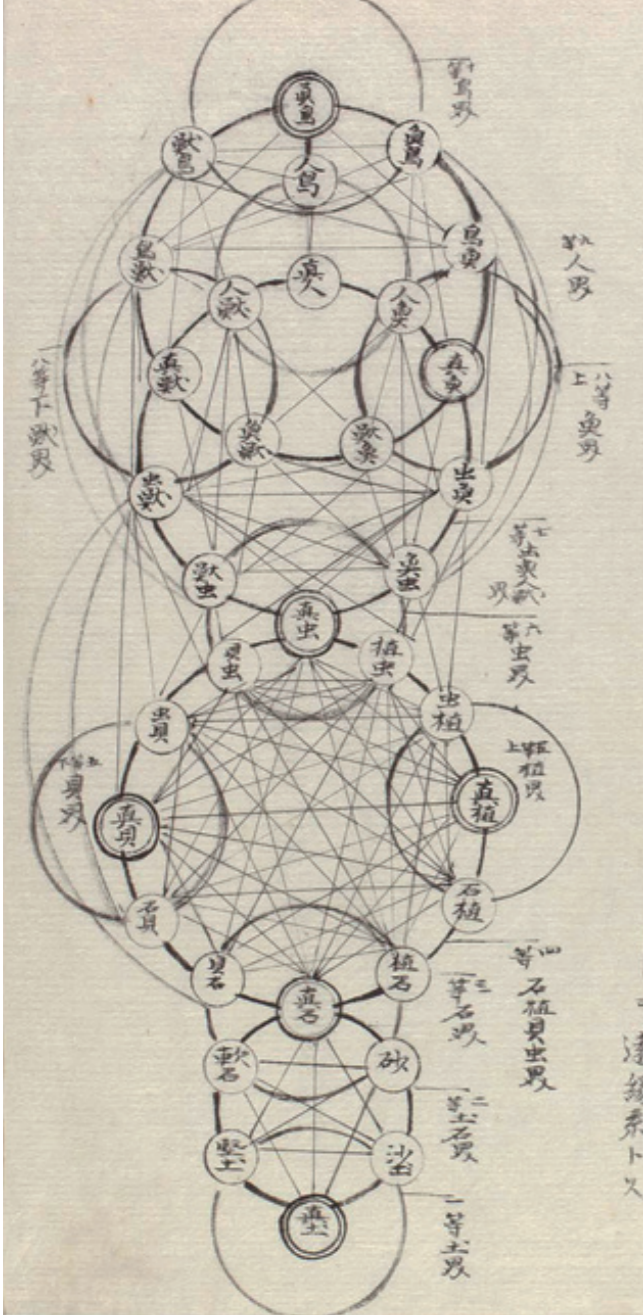
明治14年5月

胤保は57歳で蝶の採集に夢中になる。記録の中でも特に「オオムラサキ」を追う記述は事細かで、その時の熱狂ぶりが伝わってくるよう。おそらく現存する日本最古の蝶採集日記といわれている。



胤保が使っていた硯箱と絵の具箱(松森家所有/大宝館に貸与)

「二つの種類の間には必ず中間の存在があり、万物は連続している」という独自の進化論で、本草学概念を打ち破る。その持論により、下図の「人魚」のような存在も信じていたと見られる。この人魚は実際には、サルの上半身と魚の下半身をつないだものと考えられている。



松森胤保の自然史①

『銃猟誌』

慶応元年6月/明治16年5月

家老という特権階級にあった胤保は、慶応元年6月6日に銃猟の許可を得た。絵図には、弾がどのよう命中し貫通したかまで驚くほど微細に記載。



松森胤保の自然史②

『大泉諸鳥写真画譜』

天保11年/明治11年



大泉(出羽国飽海郡、田川郡)で捕った鳥の記録で、天保2年(14歳)で描いた図から明治11年までを記録。「写真」は写生のことで、この中の記事の多くを切り取るなどして『両羽博物図譜』の「禽類図譜」の稿本に加えている。

『両羽博物図譜』を読む



庄内の自然を駆け回って得た自らの視座を原点に江戸の本草学だけでなく、欧米から伝来した知識にも見聞を広げ、一つの地域の動植物を収めようとしたこの図譜は、現在の動物図鑑の先駆けとなりました。今もその壮大なスケールと細大な記録に圧倒されます。



酒田市立光丘文庫に収蔵されている『両羽博物図譜』の原本。『獣類』『禽類』『爬虫』『魚類』『貝螺』『飛虫』『植物』で構成。酒田市立図書館のホームページで全冊のデジタル画像が閲覧できる。山形県有形指定文化財。



ホンドテン(キテン)
実写の機会が少なかったという『獣類図譜』は35種60点を収録。2種のホンドテンのうち、東北産のキテン。

(左から)「シラオネツタイチョウ」と「オオワシの嘴、足、尾羽」。胤保が最も好んでいた鳥類を収めた『禽類図譜』は、図譜59冊のうち14冊を占める。



オオタカ若鳥
自身の勝気な気性と重ねてか、ワシタカ類は思い入れが特別だったようで、素晴らしい図が多い。オオタカの尾羽は、大名の弓矢の矢羽根に使われた。



キンメフクロウ
北海道で数回、本州では新潟で1度だけ確認されている希少種。この明治11年の胤保の記録は、日本最古と見られている。



ヨタカ
一見、不自然にも見えるこの姿勢は、枝に止まっている様子を描いたもの。生態学的、動物行動学的な視点が表れたこの図は、磯野直秀さんが「指折りの逸品」と称賛している。

特集 Special Edition 松森胤保の世界

かりになります。もう一つは、独自の進化論を提唱していること。ダーウィンの進化論、ド・フリースの突然変異説より先に、胤保はそれらしき進化の姿を動植物に見て書き記しています。

「万物一系理」という胤保の進化論は、「二つの種類の間には必ず中間の存在があり、万物は連続した存在である」というもので、その正否に古さはあるものの、胤保は自らの経験、知見から独自の論説を導き出しました。当時、こうした独自の説を唱えた人は、近代生物学者の中にもいなかったといわれています。「二つのものに対して徹底的に追及しようとする資質は、藩校教育の

ような地域特性があったようにも感じます。あらゆるものを集め、そこから広く全体を見回して、誰もやったことがない体系化を目指した。その高い意欲は磯野先生が言った『枚拳の精神』が成せるものでしょうね。」

「枚拳の精神」が生んだ 森羅万象の進化の姿

磯野さんは翻刻本の解説の中で、この図譜の特色を「種の特徴を十分に

らえており、昆虫や魚類の図の過半は「同定可能」と、極めて高い正確性を述べています。では、生物学の視点で、この図譜からは何を読み解くことができるのでしょうか。自然写真家の永幡嘉之さんに教えていただきました。

「まず、これほどの種類の動植物が、彼の身のまわりにいたという事実です。

今、同じ条件で探しても、減ったか絶滅したかでその顔ぶれは欠けます。また、この図譜の中の一つに『人からもらった』と書いた上で、目が茶色いトンボが描かれています。このトンボは生きている間は緑の目をしているんですが、それを想定しながらも、実物があるのまま記録していて、偽りや想像がないんですね。自然科学の面からも、とても信ぴょう性が高いんです」。

写生は「写真」。自然のノンフィクションの姿

図は大半が原寸大で描かれ、生態を熟知していなくては描けないものばかりで、トンボが飛んでいる姿も、キツツキが木にとまっている様子も、筆を躍らせながら自らの目に焼き付け、記録していた様子が見て取れます。その卓越した画力と博物学の知識はいずれも独学で、胤保は日本の本草書やヨーロッパの図鑑も鶴呑みにせず、あくまで自己流を貫きました。「胤保もきつと図鑑を作ったかっとは思いますが、生き物の性質に加えて、自分とその生き物との関わりまで書いたんです。その後、日本でも図鑑が作られ始めると、西洋に追いつこうと分類学に特化した学問的な図鑑ができていきました。結果、人の生活の中にあつた生き物の情報はそぎ落とされてしまった。胤保の

記録は、そういう点でも貴重なんです」。

生きた記録を残した類まれな好奇心と思索力

永幡さんはこの図譜の価値を「本物が描かれていること」と言います。見たままを伝える写実性。ひたすら好きなものを集め、網羅しようとした強力な好奇心。そして自分なりの分類をも見出した強い思索力。それが、たとえ選ばれた階級であつたとしても、他者が持ち得なかつた松森胤保の能力である、と。「マニュアルも何もない時代に、自分の目であらゆるものを確かめた、これは100%のオリジナルです。この地域の自然を最大限に眺め、楽しんで見本ですよ。コピーが氾濫した今の時代にこの図譜を見ると、ここまで自分の観察眼を持つていた人がいたのだと、胸のすく思いがします」。

「枚挙の精神」と「本物を見る目」で綴られた59冊の図譜。鋭い観察眼を持ちながら、そのまなざしは生きとし生けるものへの愛着で輝いていただろうと、筆致から感じる事ができます。遠くの空に、足元に、万物が生きる愛おしさ。松森胤保はそのまなざしで、今も庄内の空から、自然と人を見つめ続けているのかもしれない。



特集 Special Edition 松森胤保の世界



『植物図譜』は全28冊で、キクやカキツバタなどの花の園芸品種や果樹が多数。サクラソウ(写真中)も胤保は栽培ものしか見ていないとあるが、戦前までは湿地に自生していた(現在、野外では絶滅)。写真下は在来種の大宝寺柿。渋柿のため「サワシ柿種」と記載されている。



上の6種類はいずれも赤トンボ。すべて雌雄のつがい(組み合わせ)が正確に描かれ、産卵時に連結して飛んでいるのを日頃から観察していたと考えられる。下の二ホンカワトンボも実物そのもの。改めてその鋭い観察眼に驚かされる。



(左)胤保が長く飼っていたスッポン。(中)昔、小川や田んぼで見かけたエビたち。農薬が使われ出して大半が絶滅した。(右)カレイやヒラメ類は表裏が描かれている。図は口細。



胤保は蝶やトンボ、セミなどを「飛虫」と呼んで8冊に収録。鳥類に次いで優れた絵が多い。セミは30歳頃から収集。図はエゾゼミ。



タキタロウ館の タキタロウ手ぬぐい

「幻の魚」といわれ、もはや実在しない
UMA(未確認生物)のようになっている
巨大魚タキタロウ。果たして本当のところは?!
そんな最新情報を、グッズとともにご紹介



朝日連峰の山道をひたすら進み、登山口から3時間歩いていくと、静寂なブナ林の合間に神秘の池が現れる。タキタロウ伝説のある大鳥池だ。

大鳥池は新潟県境に近い以東岳の麓にある高山湖。いつからタキタロウが棲息しているのか、地元大鳥集落にはかなり昔から話が伝わってきた。「タキタローを釣って熊やカモシカと一緒に新潟へ売りに行っていた」「生け捕りして家の池で飼っていた」「食べた」云々。特に食べたという住民はかつてかなり存在し、2〜3mの身はヌルヌルし、顔は異様に下顎が大きくグロテスクだが、ピンクで焼くと脂がのっついて、とても美味しいという。

地元でその存在を疑わなかったこの巨大魚が広く知られるようになったのは、昭和40年に漫画『釣りキチ三平』に「O池の滝太郎」として紹介されたことだった。昭和57年には、登山中のグループが大鳥池を泳ぐ2m前後の巨大魚を目撃。翌年、初の本格調査が行われ、イワナやヒメマスが棲めない深さに多数の魚影を確認。以後、多くの釣り人がロマンを求めて訪れるようになった。

時を経て昨年9月、大鳥地域づくり協議会が専門家などを交えて30年ぶりに調査を実施した。そしてかつてと同じように、水域深くに相当数の魚影を確認、タキタロウの存在を確信した。調査隊長の工藤悦夫氏は、存在を匂わせつつも姿を現さないタキタロウに胸を撫でおろし、「いつまでも幻の魚であってほしい」と話している。同時にタキタロウの存在は、大鳥の自然が今も変わらず保全され続けていることを物語っている。

自然とロマンの象徴・タキタロウよ、永遠なれ。



何とも可愛らしくデザインされたタキタロウ手ぬぐいは、平成25年度にあさひむら特産品開発協議会で企画され、月山あさひ振興公社が製造販売しているもの。水色と赤の2種類。他にもタキタロウグッズにはTシャツ(大人用・子ども用)、メモ帳、クリップ、クッキーがあり、取り扱いは、タキタロウの資料も展示している大鳥集落のタキタロウ館や産直あさひ・グーなど。

タキタロウ館 ☎0235-55-2452 (今年は5/1オープン)



桜と堅香子

い散る桜に気がついた。ここは、桜と堅香子が一緒に咲くのだ。

一面に咲く堅香子の花は、一花ごとに皆違った表情を見せてくれる。寄り添う親子のような花もあれば、まるで喧嘩しているように背中を合わせる姿もある。^{*}ばんげや菊咲一輪草などと仲良く語り合っているような様もあり、見飽きることがない。

寝転がってファインダー越しに、俯いた花の中を覗いてみた。恥ずかしがりやの中に、長い冬を越してきたという芯の強さを感じる。華奢な細いようなじがなんと妖艶に見えて愛おしい。この春の妖精は、この一瞬の輝きの時を過ぎると、また来春に向けて、眠りという準備を始める。

数咲いて花かたくりは一つづつ

―五十嵐播水



日に日に色づく山

庄内俳句紀行

堅香子の花咲く
下田沢を歩く

庄内平野のあちこちで桜の花が満開になる頃
雪深い山里にもようやく春がやってくる。

薄紅色の山桜、萌黄色の木々の芽吹き、そして白い残雪が
山肌のキャンバスに絵筆を置いていく。

※「堅香子(かたかこ)」カタクリの古名

雪解水折れ曲がることなかりけり

―あべ小菽

大鳥川にかかる吊り橋を渡りきると、
その先に堅香子の花畑が広がる。歩くと
足元から堅香子たちの囁きが聞こえるか
のようだ。春禽の声が響く。ふと風に舞



堅香子

大鳥川に沿って散歩道を歩くと、春の
日だまりの中、ひらひらと妖精のように
飛ぶギフチョウを見ることが出来る。立
ち止まってよく見ると、どうやら堅香子の
花畑の中には蝶の道があるように思える。
こうして自然の景の中に身をまかせて
いると、自分が自然の一部であり、
その自然に置いてもらっているというこ
とに気づく。



一面に咲く堅香子

日溜りは花の溜り場蝶の道

―あべ小菽

奥深い里山では春を迎えると、木々た
ちが相談していたかのように一斉に芽吹
く。雪に閉じこめられていた生命が一気
に萌え出す。それは、深い雪と寒さに身
を締め、耐え抜いてきた我慢が堰を切り
流れ出すかのようだ。



大鳥川の雪解水

私はこれらすべての生き物の生命力か
ら新しい力をもらったような気持ちに
なった。雪国で暮らさなければ、この春
が訪れる喜びはわからないであろう。ま
た、奥深い里山だからこそ、その喜びは
一層である。

春遅し泉の末の倒れ木も

―石田波郷

※「ばんげ」ふきのとうの庄内方言

◆下田沢かたくり園 鶴岡市下田沢

写真・文 〓あべ小菽(月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員)